

# 随想

## 白馬の思い出

青木重雄



昭和十八年七月といえ、大東亜戦争もようやく中だるみになりかけていた。

大阪の麻会社に勤めていた私は、友人で歯科医のN君と同行で白馬岳に登ることを決めた。それまであまり登山の経験がなかっただけに、好きなテニスの試合に出る直前のような、ちょっとした不安とフアイトの入りまじった軽い昂奮が心をとらえた。

はじめて見た信州の夏の風景は、アルプスから流れ降りてくる万年雪の溶け水のように清冽だった。

大町から大雪溪あたりまでは、六甲山に登るのと同じような調子で歩いた。途中の溪流で飲んだ水がとても清らかで冷たかった。だが雪溪のそばまでくると、とたんに大気がつめたくなった。雪の上を歩き出してしばらくの間は夢中だったが、ようやく地上と違って、歩行のテンポが鈍ってきたことが気になり出した。

さっきまで前後にいたと思われる他の登山者の姿も、急に見えなくなつて、ときどき遠方から人声が風に乗ってくるのが、まるで別の世界からのような錯覚を感じさせた。

突然、私はまっ白い一角に一つの小生物、というより高山のひややかさとは対象的な生きものの存在を発見した。蜂だった。博物の標本さながらに凍てついた？ ままの姿で眠っている。一瞬、かすかな驚きと神秘感が私を捕えた。

雪溪を歩き出してからすでに一時間近くも過ぎたろうか。やっと二人は雪溪のはづれまでできていた。

ほっと安心するとともに、気持の疲れも急に出てきた。そのうえ夕闇と一層の冷たさが身に泌み始めた。

急に「しっかりしろ」というNの声が数メートルさきからきこえてきた。「うん」と答えたものの、やはり足が無性に重たい。思わず「ブドウ酒を一杯くれ」と叫んでへたばってしまった。青年らしい恥辱感とあせりが胸を一杯にした。

その時のブドウ酒が、稀薄な大気と冷気と疲労に弱った自分をどんなに力づけてくれたことか。やっと私は再出発を開始した。高貴な女性たちのように、かすかに揺らぐ高山植物の花々の間を。

だが、まだ頂上はなかなかやつてこない。山小屋で誰かが振るカンテラの灯はじつにま近だのに、全力をふりしぼって何十分間登りつづけたことだろうか？ ついに山小屋へ着いた！

帰りは軽快なスケルトンオ調だった。

峰々を下りながら、淡霧の中をくぐり、ヤッホーを何度も連呼し、時には雷鳴を足下ででき、珍らしい雷鳴の姿も見かけた。ただちょっと調子が弾みすぎて、Nがとつぜん足を滑らして谷底に落ちかけたのは、まさに冷汗三斗の思いだった。

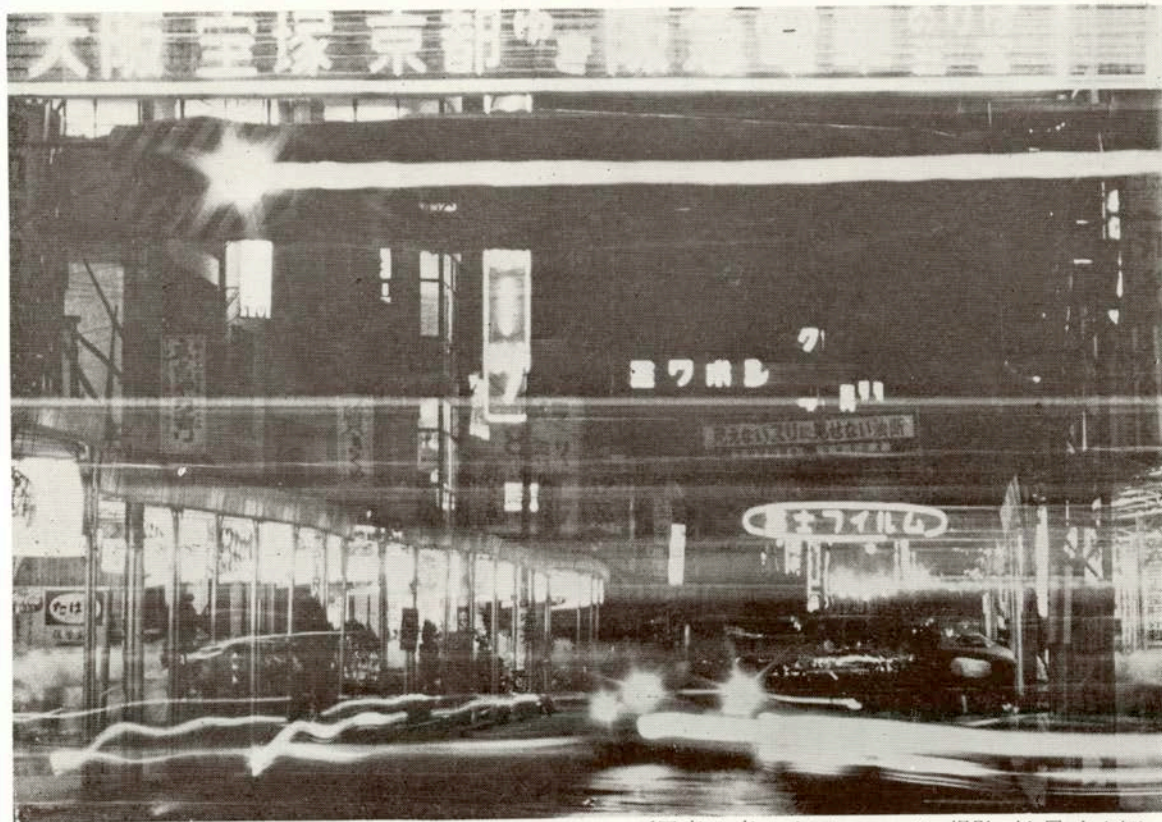
山は青年の永遠のあこがれに相違ない。

今でもこの時の思い出が蘇ってくる。山は決して、あまり楽々と登るなけれ。少しは苦方して登る方が、楽しみも倍増しようというものだ。

山百合を愛でつつ霧をくぐりつつ

雪溪に蜂のむくろや雷下 (神戸新聞論説委員)

ここに神戸がある / 司馬遼太郎  
え・中 西 勝



(写真は夜のトア・ロード・撮影 杉尾 友士郎)

## トア・ロード散歩

これで何度目かの神戸だが、だんだんと神戸がわかってきた。しかし、もっと明瞭にわかったことが、ひとつある。

神戸の町とは、意外に小さな町だということである。

摂津や播磨の山川草木までホウガンしてしまつた神戸市は、なるほど神戸ではあるが、マチの部分は小さい。

マチの部分が小さいということは、これからの神戸の繁栄を考えるうえで、非常に都合がいい。

「そうやないか、五十嵐さん」

「そうですかいな」

五十嵐さんは、不得要領な顔をした。

「おれはだまされていたよ」

「なにに、ですねん」

「神戸の繁華街に、や」

そうではないか。

私は、五十嵐さんに、神戸をおしえたげるといわれて、さまたまな町をあるいてきた。

元町

三宮

センター街

大丸前

で、きょうは、トア・ロードの坂をあるいている。

この五つの商店街は、それぞれ独立し、それぞれ個性をもち、たがいに歴史の相違をはこっているが、私はそれらを一回に一カ所ずつあるいたがために、それぞれ、ずいぶん離れた場所にあるものだとおもっていた。

ところが、ごく近い。ひとつのせまいブロックのなかにある。

※

「たしかに」

と、トア・ロード商店街の会長である磯川太良氏がいった。

「ひとつのブロックなんです。それが各個ばらばらに栄えようとしているさかい、はなしがややこしい。一つのブロックとして、都市計画を考え、繁栄を考えんと、これからの商店街はあきまへん。

つまり、それぞれの個性を生かしつつ、有機的に結びつかんといきまへんな」



磯川さんのようなタイプのひとつは、東京や大阪にはいない。

「市民志士」といったひとなのだ。いつも市のことを考えているおれが市長ならこの町をこういうふうにする、という手の施策を烈々と考えている。

私が神戸をあるきはじめてもっともおどろいたのは、磯川さん型のひとが非常に多いということだった。

これは、どういうわけなのか。

日本では神戸だけにしかないこの特徴には、どことなく西洋のおいがある。都市国家から発展した西洋の町には、町全体を自分の家庭だと考える伝統がある。共和思想とはそういうごく自然なナリタチのなかからうまれてきたものだ。

そのあと、マキシンの渡辺利武氏、婦人下着「スギヤ」の杉浦実氏などに会ったが、いずれも、この型のひとである。

かれらは神戸を愛し、それぞれが繁栄のプランをもっていた。

とすれば飛躍的な神戸繁栄策が考えられてもよいのではないか。

たとえば、大阪のキタの繁華街に「お買物は神戸へ」という大ネオン塔をたててはどうだろう。

神戸の商法は、伝統的に、品質第一主義だという。

事実、元町でもトア・ロードでも、わざわざ大阪や東京から買いにくる客が多いときいている。

そういうごく一部の眼利き連中だけの習慣をもっと拡大させて、新聞、テレビ、ラジオなどの広告媒体をつかって、他都市に対してもっと神戸の商店街ブロックを売りこむ必要があるのではないか。

※

車が県庁のそばまできたときに、五十嵐さんが

「ちよっと待っててください」

と姿を消した。しばらくして、ひとりの男性をつれてきた。

「ああ」

と私は眼をみはった。学校を出てからかれこれ二十年も会わなかった友人が、そこにいた。

毎日新聞の県庁詰記者である赤尾氏だった。

「お前、かわつとらへんな」

と赤尾氏がいった。

「うん」



「しかし、白髪がふえた」

「これはほんのワカシラガヤ」

と、私は辨明した、

あとで、広東料理をたべさせる家へつれていってくれた。

私どもは、おなじ大阪外語の同窓だったが、赤尾君はシナ語部で

あり、私は蒙古語部だった。

「お前」

と赤尾氏が、

「クツをはかずに、ヤツワリばかりをはいていたな」

「そうや。そのお陰で、いまだに紳士グツのよしあしがわから

ん」

そのあと、「蛸の壺」という店に、杉浦、赤尾両氏と行った。

大阪には、祭り月になると明石の蛸を食う風習があるが、ことし

はまだ食っていなかった。

そのことが、ひどく気になっていたのだ。

「そのせいかな」

「なんのせいや」

赤尾氏がたずねた。

「いや、妙なほど蛸がうまい」

帰りは、また夜になった。

純粋々を絵画に求める

山田 祥三



神戸で開かれる展覧会の中でい  
ろんな意味で面白いというより  
も、はなはだ有意義なものに神戸  
美術館が主催する「われらの新人  
展」がある。こととしてまた第二回  
目であるが、その第二回展で、受賞  
第一席の神戸市長賞をとったのが  
山田祥三君である。東京武蔵野美  
術学校油絵科の出身。面立ちは一  
見年齢以上に見えるが、その「大

人」らしい風貌は  
いかにも「画家」  
にふさわしい。行  
動美術に所属して  
いる。

前記「われらの  
新人展」の裏話め  
くが、第一席を選  
び出すのに大いに  
難航したあげく、  
ともかく「新人ら  
しいオリジナルの  
打ち出し」という  
ことで、最後に山  
田君が推された。

# 計時花



六甲山のお化け

松井高男

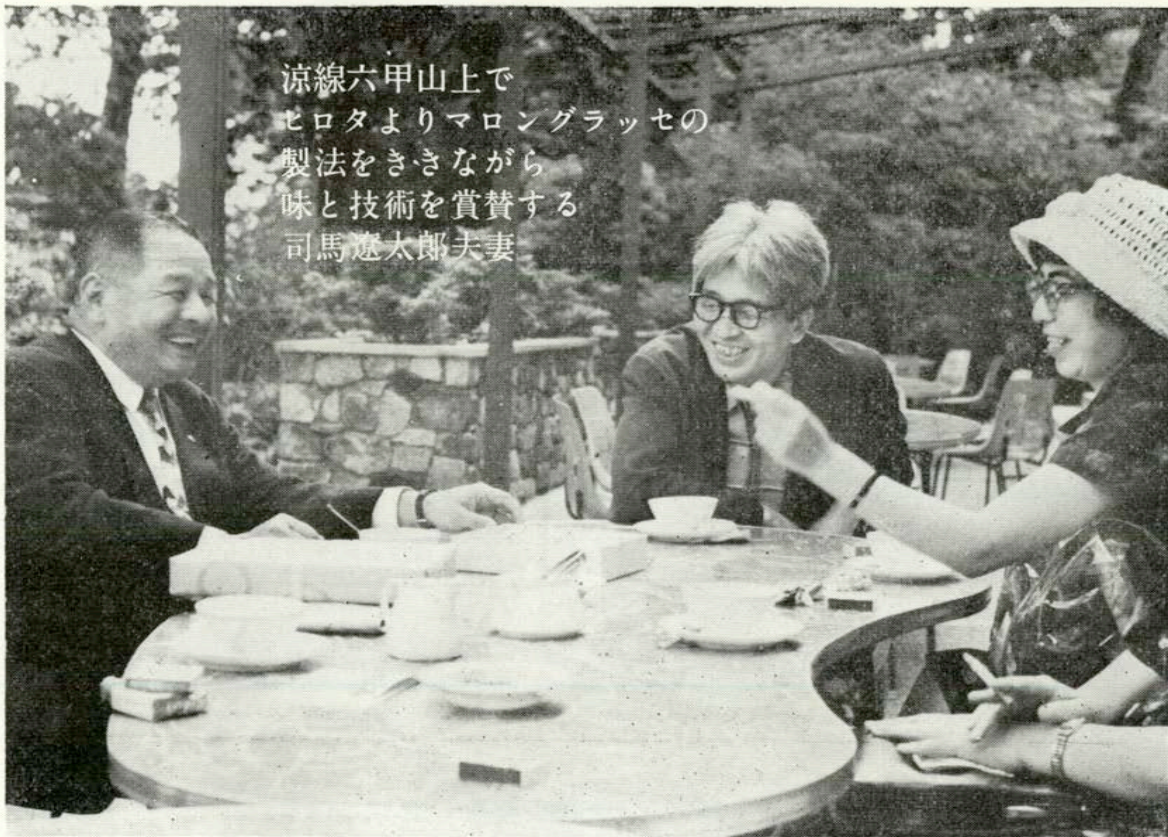
覚えておられる方がいるかどうか——戦前のこと、それも大分以  
前の話だが、六甲山に妙齡の婦人  
のお化けが出るというわきが広  
まった。場所は定かでないが、山  
の中腹に広大な邸がある。そこを  
訪ねると、ともかく男性でさえあ  
れば、ねんごろに招じ入れられ、  
山海の珍珠が並べられて大いに歓  
待されるという。さらにその邸の  
女主人と一夜を過ごしたものは  
ばく大な謝礼が渡されるという  
のである。相手がうら若い婦人だ  
けに、若い男性たちの興味をかき  
立て、行ったとか、行かぬとか、

だいぶ尾ひれがついて、まことし  
やかに語られていたようである。  
そこまでは、ますいとして、た  
だ一つ、この妙齡の婦人、おそろ  
しいことに真つ赤な口が大きく耳  
まで裂けているというのであつ  
た。その後どうなったことやら、  
二年前騒がれたドライブウエイの  
幽霊も、その後すがたを現わさな  
い。この方はもっとも、科学的？  
に解明されてケリがついているが  
それにしても怪談よりも土砂崩れ  
の方がこわい昨今の六甲山ではあ  
る。  
(神戸新聞学芸部長)

新人の個性という問題はなかなか  
むづかしいことだが、同君はす  
でにそれを計算のうえで打ち出し得  
る技術を持っている。悪くいえば  
スレていることになるが、それほ  
どに器用でありシャープなのだ  
といえるだろう。だから、同君の今  
後にとって、これは非常に力強い  
ことである半面、気を付けなけれ  
ばならぬ点でもあるわけだ。

しかし同君は、決してその道を  
ふみ誤る人ではないと思う。何か  
の席上でしみじみと、こんなこと  
を語っていたのを覚えていて、い  
ったん実社会へ出て、その余りに  
も不純なのに驚いた、せめて「美  
」の世界にだけは純粋なものが存  
在するだろうと考えて、あらため  
て美術学校へ入り直したという  
のである。その「甘さ」は別に論  
ずるにして何よりも、ひたむき  
なその気持ちは人間にとって一番  
大切なものに違いない。その一途  
さが画面ににじみ出て来る日を期  
待したい。  
(伊藤誠)

涼線六甲山上で  
ヒロタよりマロングラッセの  
製法をききながら  
味と技術を賞賛する  
司馬遼太郎夫妻



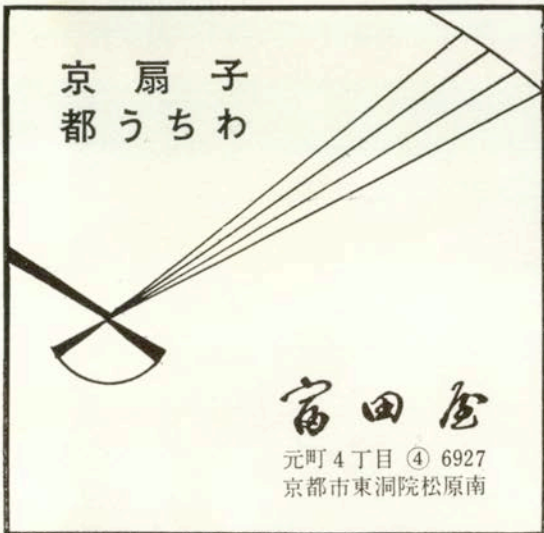
世界中の人からほめられた  
日本の誇り 神戸のほまれの!

**マロングラッセ**は  
**ヒロタ**の銘菓です

元町通三

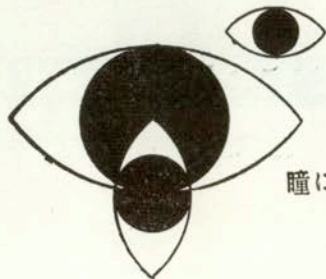
TEL.(3)2340・3523

京 扇 子  
都 うちわ



富田屋

元町4丁目 ④ 6927  
京都市東洞院松原南



瞳に美しさを保つ  
スポーツに  
美容に  
現代の科学が生んだ  
コンタクトレンズ

国際コンタクトレンズ研究所

神戸市葺合区御幸通八丁目九ノ一(三宮駅前)  
神戸国際会館内 TEL ② 8161・8361



理容センターを

ご存知ですか？

神戸のメインストリート・センター街の上田洋服店の向い(マリア婦人服店2階)に近代的な設備とゆったりと落ついた雰囲気のリ容センターが誕生しました、信頼のできる腕利きのスタッフをそろえて、みなさまのお越しをお待ちしています。

この理容センターでお寛ぎいただいて一段とスマートになって商用に会合にデイトにお越し下さいもちろんお値段もスタンダード、気軽にいちどおたちより下さい。



# BONSOIR MADAME

マダム コンパニフ

## CULB NAGISA

な ぎ さ



夜の七時頃。ようやく客のたちこめるしおどきを見はからったかのように、マダムのヨサノ・ヒロコさんは、入口のドアをさっと押しひらいて、その婉姿を現わす。含羞をふくんだ彼女の眼差しはまことに魅惑的だ。

美しいマダムにほほえみかけられた時は、さながら夢の国を訪れた錯覚におそわれた：という甘い文章を読んだことがあるが、そう言いたいほど「なぎさ」のママの眼は憧れをおびて美しい。

それぞれのテーブルの客にさりげない微笑をなげかけては、いとなく話題の中に入ってくるホステスぶりもまた見事である。

映画「女が階段を上るとき」のヒロイン、高峰秀子の姿態をふと心に思い浮べたが、彼女はもっと柔眉な感じだ。十人近くいる女の子もママの薫陶をうけてか、がさつな子は一人もない。ビール一本も飲まぬうちに、こちらが退屈してしまふ女の子の多いバーがおおよそだが、だまって飲んでいてもなんとなく心に愉しさが湧いてくるようなデリカシーをこの女の子はもっている。そしてハイボール一杯の客も大切にあつかってくれるのはいい。

客筋はロータリアンクラスの各界の大物が多い。店内もまたそれにふさわしく、装飾、調度品、照明など、デザインの一つ一つが落ついたハイモニーを保って、憩の場にふさわしい豊かなムードをかもしだしている。一流の雰囲気だ。場所は生田新道の西から初めての小路を北へ入り、突当りをちよっと右折し、さらに山手へしばらく行った角にある。

(K)

## 名づけて

## ハイボール

アメリカで初めて鉄道が敷かれたのは1820年代の終りからで1829年にはイギリスから4台の機関車を輸入して走らせたが、これを手本にして翌年には早くも

う大自然。したがって大陸を東西に横断する鉄道というものは、いまだ手がけられず、駅馬車がギヤングやインディアンをおそれながらも、雄々しく馳けていた。西部の開拓こそアメリカの繁栄も考えた国民すべての願いが実って、南北戦争のさなか1862年に東

## 洋酒はなしのタネ

藤本義一  
画・佐々木侃司



国産車が使われるようになり、1860年頃になると、東部一帯の主要都市はすべて鉄道でつなぐことができた。

しかし南北戦争(1861年ほつ発)以前のアメリカは、南部と北部、そして西部の三つの国にわかれているようなものであって、とくに西部と東海岸の洲をへだてているものは、ロッキー山脈とい

部はオマハ、西部はサンフランシスコから、同時に鉄道建設は始められた。ところがこの工事は、西部を自らの土地と考えていたインディアンを怒らせ、彼らは毎日のように線路の各所を襲い、その完成をさかんに妨害した。これを防ぐために、なにかいい方法はないだろうか? ヒタイを集めて相談の末、ハタと手をうって決まっ

た名案というのは、沿線の随所に空高く気球をあげておいて、襲撃にやって来たらいち早くこれを発見しよう」というのである。その知らせで両隣りの現場からもすぐ応援はやってきたし、軍隊も助けに来てくれた。それから工事はどんどんはかどって、1865年5月10日にはユタ州プリモントリー・ポイントで東西が感激の握手をかわしたが、その祝賀会の席上、人々はお互いにこう話し合ったものである。

「まったく、あの空高く(HIGH)あがった気球(BALL)のおかげだったよ」

そのとき出された飲みものがウイスキーのソーダー割りだったので、以後これをハイボールと呼ぶようになったといわれているのだが、まあ、眉にツバをつけて聞いていただけは結構である。

## ウイスキー・ハイボール

ウイスキー適量と炭酸水で作る簡単な飲みものです。普通中型タンブラー(八オンス入れ)に、ウイスキー適量(人差し指の厚みが基準)を入れ水二片ほどを入れ、冷えた炭酸水で満たします。

強いのがよい方は、Wになさるといいでしょう。好みによっては輪切りのレモンをそえてお召し下り下さい。

ビジネスにレジャーにあなたのマスコット

コニヤッピー

誕生!!

現金正価 ¥225,000



# 神戸の学園

No. 4

甲南大学をたずねて

提供 /

兵庫ギヤイアント株式会社

(左写真は甲南大学東館前にて)

兵庫区大開通三丁目TEL⑤九三九三

# ブストチーム

甲南大学ヨット部



輝やかしき  
部歴を誇る

甲南大ヨット部

甲南大学ヨット部は、今年創部九年とその歴史は若い、優秀な部歴を誇っている。現在、関西学生の一部（A級）に所属し、所有艇数も関西で一番多く、十四艇、最近四年間の成績をみても、全日本選手権で総合五位六位を占め、スナイプ級では優勝、また個人選手権では甲南のOB現役が関西全日本で優勝、あるいは準優勝の好成績をしばしば遂げている。ローマオリンピックにも関西からただ一人甲南のOBが選抜されたし、東京オリンピックにも代表を出す可能性は大きい。

このようにヨット部は、三十余部を数える本学運動部の中でもAクラスにあり、将来まだまだ楽しめる部として期待されている部員数は三十五人である

主将・安田浩之助

（経済学部四年）

マネージャー・家城透（同）

ところで、ヨットは夏のものとい一般に思われ勝ちであるが、われわれヨットマンは四季にわたりヨットにのっている。

練習が始まるのは、毎年三月一日からで、セール（帆）やデッキ



に雪を積んで走ることもしばしばである。寒さで口がきけなくなったり、沈没などして十分間も水につかっていたら神経がマヒする程だが、こうして体力をつけシーズンに備える。

六月ともなると気候は、ずっとよくなる。試合が多く、勝った負けたで喜んだり悲しんだりするのもこの頃。服装も半ズボンに白シャツが多く、練習にも熱が入り雨中の練習も多い。

七月には、一番大切な試合「関西選手権」がある。そしてこれが終ると新旧メンバーの交代となる。秋九月からは新メンバーで練習開始。十一月中で全日程を終え十二月は、艇の整備で、ペンキの塗り替えーとヨット部生活の一年はほとんどヒマがない。

ヨットといえば誰もが「遊び」を想像するが、スポーツとしてのヨットは厳しく、強い忍耐力、精神力、体力が要求され、素早い判断力があることから「頭と忍耐のスポーツ」と呼ばれている。

心身ともに人間的にも秀れた人物になるには、大学で四年間ヨットマンとして鍛えられるのが、一番良い手段といえるのではないだろうか。

(同部員・山本茂樹)